

章廷謙という人,彼と周氏兄弟の関係

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾崎, 文昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/9021

章廷謙という人、彼と周氏兄弟の関係

尾崎文昭

章廷謙という人は決して有名な作家ではない。その筆名を冠した薄い《川島選集》（人民文学出版社、北京、一九八四年二月）の〈序〉に中国現代文学史家の王瑤が言う通りである。

現在の若者は川島という名前にすでに恐らくなじみがなくなっているだろう。しかし、現代思想史および文学史の中で《語絲》が有する地位と業績に注意を払う人であれば、《語絲》の「言いたいことを言って遠慮しない、新しきものの生成を助け育てる一方、新しきものに有害な旧きものに対しては極力排撃する」といった総体的「特色」（魯迅へ我和《語絲》的始終）を見ると、川島の文章と貢献とを忘れるはずがない。

この小雑誌《語絲》は、一九二〇年代後半の中国において、知的にまた文学的に非常に高い水準を示し、相当に大きな社会的影響力をもった。その編集にまた文章に心血を注いだのが、近代中国が生んだ最高の知性の中に数えるべき魯迅と周作

人、世に言う周氏兄弟であり、彼らがこの雑誌の「顔」となった。

「語絲派」と呼ばれる、彼ら二人を代表とする集団には、他に錢玄同や劉半農らがおおり、雑誌《新青年》から生まれた第三の集団とすることができると言える。

雑誌《新青年》は一九一九年前後の「五四新文化運動」の中で、同じメンバーで出した《每週評論》誌とともに決定的な役割を果たしたが、「五四運動」の高潮および退潮の中でメンバー間の思想的対立を深めた。マルクス主義に急速に傾いていった陳独秀・李大釗に対し、胡適らが反撥したのであった。その対立は数年のうちに、共産党機関誌《新青年》と胡適の《努力週報》という形となって顕れたが、当初のメンバーのうち魯迅・周作人・劉半農・錢玄同らは結局どちらにも同調せず残されていた。彼らは主として《晨報副刊》を文章の発表場所としていたが、同誌は、胡適らにも敬意を払い、また《新青年》以後北京文壇の中心誌ともなった、比較的間口の広い新聞附録文芸版である。同誌の編集長孫伏園が経営者に圧迫を受けて辞め、魯迅らの助力を得て自主刊行を始めたのが《語絲》である。メンバーは魯迅ら四人のほかに、若い世代の江紹原・林玉〔語〕堂・俞平伯・川島らを加えた。当初は別に同人誌ではなかったのだが、次第に寄稿メンバーが固まり、「語絲派」と呼ばれるようになる。とりわけ胡適をバックにした雑誌《現代評論》と激しく対立するに及んで、その思想的傾向が明瞭となった。

これまでの文学史的思想史的記述においては、単純に左右（マルクス主義と反マルクス主義）を軸とした直線的物差しをあてがって、「語絲派」を中間的存在、つまり「進歩的プチブルジョアジー」としているものがほとんどのように思われるが、それでは彼らの知的活動の内容と意味と深さをとらえているとは言えない。「革命運動」を直ちに行なわないう者が、行う者に較べて知的にラディカルでないということはない、それを証明しているのが周氏兄弟の《語絲》を通しての知的活動であった、そう言えると思うし、言うべきであると思う。彼らは迷いつつも、出来合いの「主義」に身を委ねて浅い現実批

判に留まることを拒否し、絶望的現実の深部に自分のスタイルで切り込んでいったのであった。自らの身を「正義」に置いて他を言う者とはちがつて、彼らの識見の深さは我が身に自ら加えた傷の深さに見合つて手に入れたものである。当然にも、眼の届かぬ所はあり、「黄金世界」や「改革案」を明瞭に打ち出すことはできないが、それは彼らの知的活動の評価を割引きする理由にはなりえない。しかし、この極度の思想的緊張を維持してゆくのは並たいていのことではなく、次第に固まってゆく自分のスタイルに落ち着いてゆく。とはいえ、周氏兄弟の闘いは真に激しくかつ頑強であった。魯迅は冒頭の引用文中に引いている言葉のほかに、《語絲》の性格について次のように述べている。

権力者の刀の下にいて、その權威をたたえたり、またその敵を嘲笑して権力者に媚を売つたりなどはしたくない、というのが「語絲派」のやはりほぼ共通の態度であつたと言えるだろう。〈我和《語絲》的始終〉、《三閑集》所収。

《語絲》の中で語られる言葉には、他の刊行物が言いたくない、言う胆力がない、言えない言葉が多くあつた。

〈一九二七年八月十七日致章廷謙書信〉

章廷謙は《語絲》創刊当時二十三歳で、北京大学校長室の秘書をしており哲学系の助手を兼ねていた。当時の様子を魯迅は次のように書いている。

創刊の際、その努力は確かに驚くべきものであつた。その時頑張つたのは、伏園のほかに、私の記憶では小峰と川島がいた。二人ともまだ産毛の脱げきらない青年で、自分らで印刷所へ行き、校正し、紙を折り、そのうえ自分らで人々の集まる所へ持つていって立ち売りまでした。これは真に、青年の老人に対する、学生の教師に対する教訓であつて……

同じ文章中に、また章廷謙のことを「まだききわけのない子供で」とも形容しているが、これらの筆つかいにも窺えるように、魯迅は章廷謙をたいそうかわいがった。それは周作人にしても同様で、彼は周氏兄弟一家の住む北京八道灣の周宅に足繁く出入りし、住みこみ、一九二三年七月に魯迅と周作人夫妻が仲違いし魯迅が家を出てからは、魯迅の旧居室に住んでいた。《語絲》時期は、誌上で共同歩調をとるのは全く別に、周氏兄弟は互いに顔も合わさぬ間柄で、それはついに終生続いてしまったのだが、この二人の間を走りまわって雑誌編集に齟齬の生じないような心を砕いたのは、主として章廷謙であった。¹⁾

また、編集実務を共に担当した孫伏園や李小峰が結局はほとんど文章を発表しなかったのと異なり、離京までの二年ほどの間に計二十七篇を発表し、「語絲の文体」と称される主要な執筆陣の一人に数えられ、かつ《現代評論》との論争においては果敢な闘いぶりを見せた。

冒頭に引用した王瑤の言葉は、大よそ以上のことを意味しているのである。

魯迅と周作人の存在がそれぞれ大きいだけに、そして魯迅が「新民主主義時代の聖人」（毛沢東）とされ、周作人が日本占領下の北京で「協力」的態度をとって代表的「漢奸（売国奴）」と指弾されただけに、この兄弟の不和事件にはこれまで多くの思想的文学的好奇的関心が寄せられてきた。のちの乖離をもたらした思想的淵源については当然様々の角度から検討しうるが、契機となった「事件」については、周作人夫人の羽太信子（日本人）が引き起こしたと言われている本当のところはよく判らない。章廷謙は当時周宅に住みこんでおり、諍いの場面に立ち合ってもおり、内実を知る数少ない人の一人で

ある。しかも、事件後の双方と密接な関係を保った点で言えば、限られた数人の中の一人となる。章廷謙の人柄のよさ、信用のされ方が人並ではなかったことが、このことから察せられる。

魯迅は中国現代の文学者の中で今のところ唯一人、その文章ほかが細大漏らさず集められて全集が編まれているが、その中に収録された千四百余通の書簡のうち、章廷謙宛書簡は親しげに打ち解けた内容で特に目立っている。魯迅夫人許広平宛書簡に次ぐ親しさではなからうか。魯迅が一九二六年八月北京を離れて、厦門・広州・上海と転々とする間、魯迅を追って厦門に行き、間もなく杭州に暫時居を定めた章廷謙に宛てて書きつがれた手紙が、しかし一九三〇年の夏でプツリ途絶えている。それまでが非常に打ち解けたものであっただけに、人に奇異な感じを抱かせる。その経緯には、魯迅と周作人の関係の続き方でありよう、「語絲派」の解体についての魯迅の見方、さらに魯迅の対人関係のつくり方の特徴などが窺えるように思われる。

以上の三点、章廷謙川島の《語絲》において果たした役割、周氏兄弟不和を知悉していること、魯迅の対人関係の一つの典型、こういうことで、私は章廷謙に興味を感じてきていた。数年前、中国留学を申請したとき、研究計画の第一項に考えたのが、北京大学中文系に健在だと聞いていた章廷謙にインタビューすることであった。

一九八〇年秋、北京大学に腰を落ちつけて間もなく、中文系の事務室にいき章廷謙先生に会わせてくれるよう手配を頼んだ。しかし、今病床にあり会って話をきくのは無理だ、そのうち少し恢復したら会わせてやるから、と断られてしまった。半年ほど経ち、次第に様子を了解して、度々要求しなければ要求を本気に受けとめてはくれないことを知った。そこで数度要求を繰り返したが、答はいつも同じであった。他の先生からも病気であるとは聞いていたが、その程度はよく判らなかつ

た。話では文化大革命中に相当いじめられたということで、まだその余波が残っていた当時だから、外国人との接触を嫌がって病気を口実にしているのではないかと疑っていた。

六月（一九八一年）の初め、中文系の留学生修学旅行から帰ってきて、たまった新聞を読んでいると、何と、「川島逝去」とあるではないか。それで、インタビューの計画は泡と消えた。今だに残念には思うが、しかし、機微の大して判りもしないだろう、口に出して言えば判る力があつたとしても言う訳にはいかなない外国人を相手に、貴重な時間と力とをたどえ無理に割いてもらっていたとしても、それでは後味が悪かつたろうと、納得した。その後の体験で、老人相手のストレートなインタビューでは大した内容はまず聞き出せないと知って、余計にそう思った。

その後、章延謙川島の死去を悼む文章を二、三読みまた人に話を聞いて、戦争以後のこととりわけ文革中のことが多少判った。

一九三二年夏到北京大学校長室秘書に戻りまた講師を兼任していた章廷謙は、抗日戦が始まると学校とともに長沙から昆明へと戦火を避け、西南連合大学で同じ職を続けた。一九四六年に学校とともに北京に戻り、北京大学中文系の助教授となり、散文習作を教えた。そして八十歳で死去するまでその職にいた。一説によれば、学者としてはあまり重んじられなかったという。文章家としても、北京に戻ったのち計二十余篇の短文があるのみで、しかもそのほとんどが魯迅にまつわる思いつきを記したものにすぎない。つまり資料提供者の価値しか認められないと、酷く言えばそうなる。しかし、彼の人柄については皆異口同音に褒める。文革中の圧迫への頑強な抵抗についても同様である。一九六六年に文革が始まるや直ちに批判を受け、六九年には「昔からの反革命分子」と判定され、七十歳前後の老身に酷い仕打ちを受けたが、頑として罪を認めず、ついには「嚴罰の典型」にされ、自分は雑役をさせられ、夫人は身体不自由となり、息子は階上より跳びおりて死なせてしまった。彼はそれでも無実の罪名を片鱗も認めず、ために七六年に名誉恢復の措置を受けたときには、逆にいささかの疑点

も残らなかったという。溫柔な質の章廷謙にしてのこの頑強ぶりは、魯迅の精神を心の底で受け入れていたことの顯れである。また、《語絲》時期に培った精神あるいは思想の質が試練に会ってその輝きを放ったと、言うことができるのである。⁽²⁾

二

章廷謙、一九〇一年、紹興の生れ、字は矛塵、筆名が川島。周氏兄弟の同郷人である。一九二二年夏、北京大学哲学科を卒業し、校長室歐文秘書となり、哲学系助手も兼ねた。同時に《晨报副刊》に短文の社会評論及び詩的散文を発表し始めた。

川島の散文はほとんど散文詩と言ってよく、中国現代文学史においては、このジャンルの最も早い時期、開拓期に属する作品となっている。先行のものには魯迅の試作《自言自語》（一九一九年）があり、同時期には謝冰心作品がある。この種の文芸を提唱したのは周作人の《美文》（一九二二年）であり、周作人の試作もある。川島は散文九篇をまとめて《月夜》（一九二四年八月）を出したが、これは中国現代文学最初期の散文集で相当に歓迎されたといわれる。一年半後には再版が出ている。

内容は「大恋愛時に昇華してできた結晶」（郁達夫《中国新文学大系・散文二集導言》）と言われているように、後に夫人となる孫斐君との大恋愛を材料にし背景にしたもので、小説仕立ての十八則から成る《惘然》や童話仕立ての《鶯哥兒》もあるが、総じて、独白調の感傷的で繊細な筆調の中に、初々しい感情を書きこみ、また恋愛の喜びを歌いあげている。当時の厳しい封建的環境にあつては、愛情賛歌自体がそのまま反抗的意味をもったことは言うまでもなからう。しかし、このような作品は結婚（二四年）後ほとんど書かなくなってしまった。

短文の社会評論、中国ではふつう「雑感」とか「雜文」とか呼んでいるが、川島のこの方面の文章は、散文とは異なっ

て、相当に捻ったものが多い。当時の雜感文の書き手のうち、切口の鋭さと文章運びの巧みさでは魯迅と周作人が群を抜いていた。川島はこの二人の文に倣った形跡があり、しかし着想の不十分さを自ら意識してのことか、その分修辭に凝ったものらしい。

内容の傾向も周氏兄弟とほぼ同じと言ってよく、権力の、社会上層の、社会現象の病態を衝き、言論界で喧しい「正論」の変態ぶりを暴くものが多い。《語絲》時期の二四年末から二六年秋までの間には、社会問題についての雜感文を次々に発表し、《現代評論》との論争においては《語絲》の論陣の一翼をつとめた。

最初に発表した文章は雜文《撒担的行徑》（《晨報副刊》一九二二年八月十七日）で、五則の断章を並べ、イブセンの『国民の敵』を紹介して人の向上心への信頼を裏切る現実に怒り、学生運動とくに婦人の政治活動への抑圧に、また書信の檢閲に抗議し、高校生が三年前の「五四運動」をすでに知らなくなっていることを嘆き、さらに、公園の株主の金もうけ主義を皮肉っている。

《自第十一箇双十節以後》（同十月十日）では辛亥革命以後の正視に忍びない歴史をふり返り、根本原因は国民の思想の未改革にあり、啓蒙と同時に思想界の保守派との闘いを強めなければならぬと主張する。やや幼いながらも、「文学革命」の主張に「思想革命」で応じた周氏兄弟の主張の線上にある。

さらに《教育比革命還要緊》（同十一月七日）ではロシア革命を支持しつつ、大衆の支持獲得に苦しんでいるその様子に、バクーニンやツルゲーネフなどの言葉を引いて同情を寄せている。

また、長文の《関外与関内》（同一九二四年九月十五日より連載）では、奉天への行き帰りの車中および奉天での見聞を淡淡と綴り、悲しむべき奇怪な現象、奉天の日本租界、車中の酔った米兵などを記し、行間にそういう現象を成りたさせている社会と政治に対する不満を込めている。

《語絲》創刊号（二四年十一月十七日）に載せた〈夜裏的荒唐〉では、すでに筆調も手慣れて、諧謔の中に民国時代の皇帝（清廢帝溥儀は当時なお紫禁城に住み、城内では皇帝の体制習慣を保っていた）を皮肉っている。また同誌第四期の〈欠缺点綴の中国人〉では溥儀出宮（馮玉祥が紫禁城から溥儀を追い出した事件）につき、周作人や銭玄同とともに論陣を張り、アメリカ公使の口出しを批判する。第一七期に発表した〈人的叫売〉では、ロバとひとまとめに売られていた十七八の娘の話から歴史上の人肉嗜食の記録を、憤懣を冷笑に包んで紹介し、やや文を作りすぎにも感じられるが、周氏兄弟とくに周作人のシニカルな雑感文の文体によく似てきている。これ以後次々に発表した雑感文も、ほぼ同じような諧謔的筆調で書かれており、「語絲の文体」と称される文体の典型の一つともなっていた。第一章冒頭で引用した王瑤の一文中でこう言っている。

彼の文章は滑らかで諧謔風ではあるが、一方内容は大真面目で正義感にあふれている。《語絲》誌上で「語絲の文体」についての議論がなされたことがあったけれども、一流派として見るならば、川島の文章風格は「語絲の文体」の特色を体現していると言うことができる。

〈川島選集・序〉

また《語絲》の読者からの手紙の文面中に次の言葉もある。

《語絲》社諸氏には、私は全面的に敬服しております。中でも魯迅と豈明（周作人——引用者注）が格別で、それに次ぐのが貴兄（川島）です。考え方だけでなく書き方でも、興がのったときには模倣しようとしているものです。

王子欣〈反周事件答問〉、《語絲》第六八期。

魯迅は《語絲》に散文詩《野草》諸篇を次々に発表するかたわら、若い文学青年らと文芸誌《莽原》を出していた（一九二五年四月から）。この《莽原》について、次のように語っている。

中国の現在の文壇（？）状況は全くよくない。とはいえ、詩や小説を書く者はどのみちままだいます。最も足りないのが「文明批評」や「社会批評」で、私が《莽原》を出してひと騒ぎやらかそうというのも、これで新人のこの種の批評家を引っぱり出したい、私の舌が抜かれたあとでも話をする人間がおり、引き続き社会の仮面を剥がしてもらいたい、これが大半の理由なのです。しかし残念ながら、これまでに来た原稿は、やはり小説が多い。

《両地書》第一七信。

このように社会批評や文明批評を求める魯迅にとって、川島は信頼に足る存在であつたらう。魯迅がかわいがつたのもよくわかる。それを伝える一つの遺物があつて、川島がその由来を説明している。

〔魯迅著の〕《中国小説史略》上巻が出版されたとき、戴いた本に詩一首が書いてあつた。

どうか

「恋人の抱擁」から、

暫く片手を抜き出して、

受けとつてくれ、この無味乾燥な

《中国小説史略》を。

私の敬愛する

ひとつかみの毛兄よ！

魯迅 二三、十二、十三。

この中の「中国小説史略」の六文字は、本の扉に活字で印刷してある書名を利用してあり、魯迅先生が自分で書いたものではない。——この年は、私が結婚するちょうど前の年で、大部分の時間を恋のやりとりに使っていて、魯迅先生が毎週北京大学に授業に来られるときお会いするほかは、ほとんど先生のお宅へ伺わなかつた。……それで私に小説史略を下さるとき、この詩を付けられたのである。「ひとつかみの毛」というのは、私の当時の髪型が今で言う「学生刈り」だったので、先生が私にこの渾名を付けられたのだった。

〈魯迅先生所送給我的書〉、《和魯迅相处的日子》所収。

《魯迅日記》には、一九二三年十二月二十二日の項に本を贈った旨の記載がある。「学生刈り」とは横後ともに刈りあげて前頭の頭髮だけを長目に残した髪型のことらしい。当時の章廷謙の写真ではそう見える。

もう一つ、エピソードを記しておく。結婚のときは指輪はもとより宴席も設けず、「公告」を出して友人たちに報告しただけで極めて簡単なものだったという。中国の伝統的観念、日本でもおそらく同じであろうが、から言えば破天荒なことに属する。その後まもなく、封建的桎梏への反抗を表すために、夫人の孫斐君は率先して鬘を切って断髪になった。ために教育界および社会で大騒ぎとなり、ついに高校教員の職を失ってしまった。このとき章廷謙は平然と事に処し、この収入源を捨てるよう断乎勧めてくれたという。この頃、保守的な女学校では断髪した女学生を退学させるなどして、この種の女学生

女教員の断髪闘争は社会問題ともなった。以上のエピソードから、この夫婦の革新性が皮相ではなく本質的なものだったことが見てとれるだろう。⁽³⁾

二

一九二六年は大激動の年であった。広州では国共合作が確認され、七月に北伐が開始された。北伐軍は破竹の勢いで九月始めには武昌まで攻め寄せ、十一月には武漢政府が成立し、広州の国民党政府機構は武漢へ移った。しかし同時に国民党右派の力が強まり、三月には翌年の反共クーデターの前触れとなった「中山艦事件」が起きている。

北京では、反帝国主義反軍閥政府の大衆運動に追いつめられた段祺瑞政府が、「三・一八」大弾圧事件を引きおこした。魯迅と周作人の学生、例えば女子師範大学の劉和珍なども殺され、周氏兄弟にも逮捕令が出たと伝えられて、魯迅は一ヶ月余の地下生活を余儀なくされた。四月には奉天系張作霖軍の爆撃にさらされ、つづいて張作霖軍が入京するや左派色の強かった新聞《京報》の社長兼編集長邵飄萍が捕えられ処刑された。八月には《社会日報》社長の林白水も殺されている。

混乱と弾圧は翌年もつづき、四月には李大釗が捕えられて処刑された。張作霖軍の支配は二八年六月までつづき、かわつて国民党系閻錫山が入京し、十二月には張学良も帰順し、国民党の「国民革命」は南北の統一を達成した。しかし国民党系軍閥間の争いや、大学制度の改変により、北京および北京教育界は混乱をつづけ、一九三〇年秋頃によく平靜をとり戻した。

一方、長江流域以南では、一九二七年四月より蒋介石による反共クーデターが起こり、各地で大量虐殺があいついだ。この全国的大混乱の中で、北京にいた文学者、文人、学者の多くが仕事と収入を求めて南下した。かつて北京軍閥政府筋に近かった「現代評論派」の面々も南下して蒋介石政府にとり入ろうとした。そして上海が文化の中心地となった。

以上のような状況の中で、魯迅は北京の弾圧を避け、生活の暫時の安定を求め、また同時に愛人許広平との新生活の可能性を求めて、一九二六年八月北京を離れ、福建の廈門大学に赴任した。

廈門大学というのは、一九二一年にシンガポールの華僑陳嘉庚によつて創設されたばかりの大学で、校長の林文慶が同族の林語堂を北京から招いて文科主任にすえ、国学研究院を新設するために林語堂を通して北京の学者を招聘したのである。

魯迅の書いているものによれば、彼は二年ほど腰を落ちつけて、これまでに収集してきた漢画像についての論考をまとめ、《古小説鈎沈》とともに刊行したいと思つていた（廈門通信（三三））。しかし到着してみると生活は不便で、また学校当局者の保守ぶりにあきれて、たちまち二年の招聘を一年に短縮し、同じく北京大学から赴いた顧頡剛らの陰に陽に排斥に会うと、さらに半年に切つてしまふ。当時の様子を如実に書きとめた許広平宛書簡（《阿地書》〈第二集〉にあたる）から見れば、十月末にはすでに広州の中山大学から教授として招聘の電報を受けとり、十一月下旬には広州行きを決意している。この広州行き決定の動機として、魯迅の言う廈門大学の不快さと顧頡剛の排斥があるのは間違いないが、同時に許広平との共同生活を決意したのも大きく与つていた。それは十一月十二月に許広平との間に頻繁に交わされた往復書簡を、それも《阿地書》の形に整理される以前の原書簡を読めばよくわかる。

林語堂から同じく国学院出版部に招かれていた章廷謙は、十月に北京を離れ、まず郷里の紹興に帰り、そこで魯迅からの手紙（十月十日、二十三日）をもらった。この手紙により、廈門大学の生活の不便さ、陳源（「現代評論派」の代表人物）の徒の排斥にあつて長く腰をすえられる状況ではないことを知り、章廷謙は廈門行きを迷つた。そのうち北京の周作人から、魯迅も孫伏園も廈門大学を去るから廈門にはもう行くことはないと言つてきた。また北京の友人（李小峰？）から廈門では章のポストを奪おうとしている者がいると知らせきたため、廈門行きをとりやめるつもりになり、魯迅にそう書き送つたらしい。⁽⁴⁾

魯迅は返事（十一月二十一日）で、孫伏園と自分が近く去ることを認めながらも、林語堂をたすけるために、また動揺果てない現状の中で幾分かの収入を確保するために、それに家族連れなら生活もそれほど苦しくなると、速やかに来厦するよう促した。

章廷謙が夫人と子供を連れて到着したのは十二月二十四日、魯迅に言われたとおり、荷物を少なくしてのことであつた。彼は魯迅に会うと真先に、いつ起つかと問い、まだ数日先きだとの答えを聞いたという。一週間後の三十日夜、魯迅が訪ねてきて、明日辞表を出すから同道してもらいたいと言われると、さすがに魯迅の離厦が間近かに感じられて愉快でなかつたが、厦大の内情を知って言うべき言葉もなかつた、魯迅はさらに、本当に耐え難くなつたら広州に来ていいからそれまではできるだけ厦大にいてほしいと言つたといふ。⁽⁵⁾

察するに、居るに耐えぬ所に人を呼び、自分はすぐに立ち去るというのでは、愉快になりようがないだろう。しかし、近年出てきた同時期の章廷謙の周作人宛書簡⁽⁶⁾ではまた多少違つた様子が窺える。周作人の方は大家族を抱えて北京に残つていた。

出てきたのは厦門到着後の第二信以後だが、その第二信（一月三日）第三信（一月二十三日）——魯迅の離厦は十六日——に「大よそここの事情は、真に語堂の言うとおり、真面目にやりさえしなければ、子孫代々やっていけます」と言い、語堂が劉半農・沈兼士・江紹原・沈尹默を招く計画であること、文科の看板に周作人を切に招きたがっていることを伝え、北京と違つて給料が確実に手に入るから、一年間教えに来ぬかと誘っている。

一時は暫く留まる気になつていたらしいが、三週間後の書簡（二月十四日）では、大学から、国学院を閉鎖し顧頡剛ら二人以外の教職員を解雇するとの通告を受けたことを伝え、北京に戻れるかと問い、広州や湖南には行きたくない浙江の政局が安定するなら浙江にいたいと言う。さらに二月二十日の書簡では、自分が顧頡剛の攻撃的にされてしまい我慢できない

い、三月には断然去る、林語堂を攻撃したビラなどは学校当局の差金だったと書き、「今回は、本当に、動かないでいた方がまじだった。クソッ！」と相当に怒っている。

彼に来るように強く促した魯迅の意図には、林語堂の支えになるようにとの配慮があつたのだろうが、何か腑に落ちないところが残る。章廷謙自身も語堂を助けるべく、周作人に南下の招請を一度してはいる。しかし、林語堂自体が学校から追われるようでは、後悔の念が生ずるのも己むを得ないであろうし、魯迅に対していささかの不満が残ってもおかしくない。

二月二五日付の書簡を章は魯迅からもらう。忙しいことを伝え、広州の中山大学に小さいながらもポストを用意したから来ないか、早く返事と言う。これに対し、章は迷った。浙江の政局が落着けば蔡元培の下に研究院を作る計画があり、できればそちらへ行きたい、浙江の様子を問いあわせて返事を延していると言う（三月八日、周作人宛書簡）。章は浙江の生れであり、広州などへは行きたくないというのも、単に地方の好みなのかもしれないが、魯迅の言いなりについて行くのはいやだという感情がなかつただろうか。

そして章廷謙は浙江の杭州へ出、魯迅はほどなく、再び顧頤剛の故に中山大学を辞める。

四

一九二八年一月十九日に中山大学に到着した魯迅は接客や講演要請の応対に追われ、二月に文学系主任兼教務主任にされると、三月の改組開校の準備のために仕事に追われた。この間、《魯迅日記》によれば章廷謙からは頻繁に手紙をもらっているが、魯迅からの発信は多くない。

この頃、北伐軍が南京、上海を手に入れたことで、広州にも勝利の感が広がっていたらしい（魯迅へ慶祝滬寧克復的那一辺）が、同時に国民党右派と共産党の間の緊張は極限に達していた。四月十二日、上海で「清党」と称する反共クーデタ

一が蔣介石の手で起こされると、たちまち国民党支配区全体に拡がり、各地で大規模な虐殺が行われた。広州では四月十五日に始まったが、中山大学では学生数十人が捕えられ、魯迅が親しくしていた学生らも殺された。魯迅が大学の学部長会議で学生救出を訴えて、結局効果がなかったことも知られている。ちょうどその混乱のさ中、顧頤剛が厦門から中山大学に移ってきた。魯迅は、「顧が来れば、私は去る」と宣言して二十一日辞表を出す。魯迅は、数人にあてた手紙で、辞職は顧頤剛が来たからであると表明しており、「清党」に不満で辞めたとの世評は、自分を危険な罠に陥し入れようとする顧らの流言だ、その証拠に「顧が来れば、私は去る」の宣言は「清党」の前の四月初めにすでに表明してある、と言っている。⁽⁷⁾ これまでの事情や、筆調から見て魯迅の言が事実を糊塗するものとは思われないが、当時、手紙の検閲が随時行われていたことを考えれば、「清党」の際に学生救出に消極的であった大学に対する憤懣は絶対に書けない所であり、手紙にないからといってそれを否定する理由にはならない。憤懣は持たないわけがないが、検閲を予想して、自然な憶測を否定するよう、故意にこの説明を強調したのかも知れない。中国の歴史上そういう例は少くない。⁽⁸⁾ただ、かつての中国での魯迅評価のように、英雄的行為として大学当局に抗議して辞めたと謳いあげるのは事実を歪めている。「清党」への不満が公になれば、あるいは公に認められてしまえば、たちまち殺されかねない危険極まりない状況の中で、顧頤剛の到来を理由に、六月六日に大学が辞職を承認するまでの間の度々の慰留工作をひたすら撥ねのけたのであろう。それ以後、広州を去ればそれが口実にされかねないため、綱渡りをするように、ひたすら自宅に引き籠っていた。

この時期に、章廷謙宛に続けて十余通の手紙を書いている。同じく顧頤剛に攻撃を受けた者だということも与ってだろうが、他の者宛の書簡には見られない、顧への激しい罵りの言葉が繰り返し書き連ねてあり「……〔世故の〕教科書を作つて、川島のような小供に見せてやろうと思つた〔傍点引用者〕」などと、手紙文にしては馴れすぎたような表現が出てくるなど、非常に親密な情に満されている。それは、恋人許広平に宛てた手紙に見られるものに近い。さらに、八道湾（周作人

宅、ときは周作人夫人を意味する)をくさしたり(六月二十三日)、李小峰と孫春台の諍いでは李小峰にも厳しく(七月二十八日など)、蔡元培にも冷い言葉をむけ(六月十二日など)、蔡元培不在のとき北京大学校長代理を務めたことのある蔣夢麟も罵り(七月二十八日など)、当るを幸いというほどに悪口を、多少浮いた筆調で書き連ねている。悲憤を抱きながらも、孤立させられ、感情の出口も見出しえぬ、その鬱屈がなせる勇み足かもしれぬが、章廷謙が元来それらの人々と親しい間柄であったことをほとんど計算に入れていないらしい。心にたまった情念をどっと傾注しているという観がある。

章廷謙の魯迅宛書簡は残っていないが、引続き頻繁に出されていることが《魯迅日記》の記載からわかる。魯迅に逮捕令が出たとの流言が流れたり、顧頡剛が魯迅を告訴するとの手紙を送りつけてきたりしているから、中国各地の情勢も含めて情報交換が多量に必要だったのだろう。

魯迅が下の弟の周建人や数人の旧学生とも頻繁に手紙のやりとりをしていた(《魯迅日記》)ように、章廷謙は周作人とも頻繁にやりとりしていたらしい。周作人の書簡も残っていないから、直接に較べてみることはできないが、章廷謙の周作人宛書簡は相当に親しげに書かれている。文面の表現だけからすれば、僅かに公表されている周建人の作人宛書簡⁽⁹⁾より親しげである。

内容や表現を一つ一つ紹介していく訳にもいかないから、魯迅に関する情報を周作人に伝えていた点と、八道灣への愛着を表明している点の二点につき見ていくことにする。

一九二七年一月から九月までの間の九通(実ははるかに多いはずだが)を見ると、一通として魯迅のことを記していないものはない。元来兄弟で、仲違いして互いには通信がないのだから、誰かが間に入って仲介するというのは言ってみれば自然なこと、末弟の建人もその役割を果たしている⁽¹⁰⁾。しかも、魯迅周作人ともに互いに対して強い関心を持ちつつあった。この二人、各々、肌合いは多少異なるとはいえ、少年の頃より心を許し合ってその結びつきは尋常でなく、思想の方向性は

ほとんどすべて一致し、五四新文化運動の中で表裏一体となって「思想革命」を推し進めてきたのだから、関心を互いに失うはずがない。しかも不和は生活の次元でのことらしく、この一九二〇年代後半においては思想的隔たりは未だほとんどない、頭在化していない。

しかし他方、魯迅の章廷謙宛書簡から窺うかぎり、魯迅の方はそう度々周作人のことを話題にしている様子がない。前年の秋冬、厦門にいる魯迅が広州にいる許広平と三日にあげず書簡を交わし、その中で互いの入手した北京情報を伝えあっているが、周作人の名、あるいはそれに関する記述は真に少ない。

章廷謙の周作人宛書簡の様子と較べれば、恐らくは周作人は魯迅についての情報を知りたがり、魯迅は必ずしもそうではなかった、あるいは魯迅の癩にさわるのを恐れて比較的大きな事であれば伝えようとしなかったのではないかと推測される。

章廷謙の周作人宛書簡から例を挙げる。

御依頼の魯迅に訊ねる件はすでに手紙を出しました。

〈二月十四日〉

魯迅より手紙をもらい、紹原の旅費を電報為替ですでに送ったと知りました。

魯迅はだから孟余に人を見る眼がないと言うのです。〔これは魯迅二月二十五日章廷謙宛書簡にある内容——引用者〕

〈三月八日〉

鼻翁〔顧頡剛〕は上海南京間に旅をして有頂点になっていますが、魯迅の言によれば、彼の前途はことに樂觀を許さぬそうです。〔冒頭部とほとんど同じ表現が六月一二日書簡にあるが、後半部についてはない。失われた四月の手紙にあるのかもしれない〕

〈四月九日〉⁽¹⁾

魯迅（まだ広東にいます）の手紙を同封にてお送りします、御覧下さい。「この手紙とは七月三十一日書簡に附せられた願頤剛との往復書簡——のち《三閑集》に収められた——の写しではないかと思われる」

〈八月三十一日〉

章廷謙は、中華人民共和国成立後に書いた文章の中では周作人について突き放した、大層冷たい書き方をし、一方的に魯迅に肩を入れている⁽¹²⁾。片方は「聖人」、片方は「売国奴」と評価されており、「売国奴」に同情的であれば自分も危うくなるという状況の下では、ある程度はバイアスがかかってくるのもやむをえまいだろうが。しかし、一九二七年前半期の周作人宛書簡には次のような言葉が出ている。

〔今日は〕正に毎年先生の所で屠蘇を飲む日です。……今年も例年と同じように多くの人が八道湾にこられましたでしょうか？〔周作人宅では日本の習慣に倣って毎年正月に客を呼び会食していた——引用者〕

〈一月三日〉

小燕〔娘の名〕は近頃急に二奥様〔羽太信子を指す〕をととても恋しがっています。……二奥様、三奥様〔羽太芳子、信子の妹で末弟建人の夫人、建人は単身で上海で働いていた〕……に想いを捧げます。

〈一月二十三日〉

私達のなつかしむ心を送ります。心から先生御一家の方々をなつかしく思っています。私達の真誠の友人は皆北京にいらると感じています。

〈二月二十日〉

〔末尾に〕お元気で！奥様よろしく！

〈三月八日〉

ついでのときに土歩公〔建人の息子の豊二〕に預め運動しておいて下さい、そのときには私を秘書にしてほしいと。しかし惜しむらくは、そのとき私は八十歳近くになっているでしょう。……小燕が土歩をととてもなつかしんでいます。

〈四月九日〉

廈門から杭州と不愉快な生活を続ける中で、北京恋しさの思いが募ったことは想像に難くない。しかし、それは同時に、八道湾での起居が愉快であったこと、羽太信子を含めて親密な関係を結んでいたこと、羽太信子が、後に彼が言うような、冷たく不愉快な人間ではなかったことを証明している。

これ以前の例を挙げるならば、散文集《月夜》の中の〈惘然〉の第三節に羽太信子とその娘らしき形象が登場している。非常に親しみをこめた好意的形象である。

つまりは、周氏兄弟不和の因となったと口々に罵られている羽太信子も、章廷謙一家から見ると非常な好人物だったらしいのである。

五

一九二七年九月二十七日、魯迅は許広平とともにやつと広州を離れ、香港を経由して、十月三日上海に到着した。八日には弟建人の寓居に隣接した貸家に入り、以後、結局逝去まで上海を離れて住むことはなかった。

この頃、北京は引きつづき張作霖軍の支配下にあった。十月二十四日、《語絲》は発禁処分にあい、北京北新書局の従業員二人が逮捕された。編集をしていた周作人は劉半農とともに一週間あまり難を逃れて友人の家に隠れた。三十日には北新書局も閉鎖されてしまい、《語絲》を継続することが不可能となった。⁽¹³⁾以後は上海で続刊されることとなり、魯迅が編集を担当した。そのせいか、章廷謙は久方ぶりに《語絲》にポツリポツリと文章数篇を発表している。一方、手紙のやりとりは

一時減少する。一つには、上海到着後の魯迅は様々の用事で極めて多忙であったらしいこと、翌二八年に入ってから、共同戦線を組むべく話のついていた創造社に裏切られ、彼らを含む若手の左翼作家から、歴史の舞台から去るべき旧文人であ

ると集中攻撃を浴びて、その応対に心を奪われたことがあったからだろうし、また一つには、章廷謙の方で祖母の喪儀を出したり、第二子が生まれたりするなど、やはり忙しかったからであろう。⁽¹⁴⁾

この間に書簡で交わされた用件の主なものは、章廷謙の《遊仙窟》校点作業に係わるものである。

これは早く、一九二六年二月に章廷謙が魯迅に相談し、魯迅から和刻本を借りたことから始まっている。一九二七年七月には、魯迅は広州で章廷謙の施した標点を校訂し、あわせ章廷謙のために《序言》を書いている（七月七日章廷謙宛書簡、《序言》は《集外集拾遺》所収）。このとき魯迅の手紙で、古い写本の影印本が日本で出ており北京大学にあることを知った章廷謙は、出版計画を改めて、その影印本との校合をしたいと書き送ったらしい。魯迅は、とりあえずこのまま活字本で出したらよいと答えている（七月二十八日）。⁽¹⁵⁾しかし、章廷謙はその言に従わず、北京の周作人に原稿を送り校訂を依頼した。周作人は校訂を終えて送り返したとき、やはり序文を書き送ったのではないかと推測される。先生に校訂を依頼すれば、序文も依頼するのが自然である。

次に紹介する書簡中の文面がこのあたりのいきさつを反映しているように思われる。「《遊仙窟》に善本があるのだから、無論、善本で校訂してから印刷に付す方がよい」（十一月七日）という言葉、それに「周啓明の手紙三枚をお返しします」（十二月九日）という附言、さらに、「《遊仙窟》の件ですが、私は君が序文を書けば良いと思う。周啓明の訳文と私の古い序文については使わない方がよい。その中の材料で採りたいものがあれば使ったら良い」（一九二八年三月三十一日）という断りの文面、「《遊仙窟》の序文に私のだけを使うとのことですが、それでもかまわない。別に異議はない」（五月四日）⁽¹⁶⁾という了承。この中、「訳文」というのは、『北新』に掲載された《夜読抄（二）》という文章のことだという。この文章は周作人の文集中には収められていないようだが、章廷謙校点《遊仙窟》（北新書局、一九二九年）の巻末に《夜読抄》として収められている。幸田露伴の《遊仙窟》についての言及を抄訳紹介した文章である。一方《看雲集》（上海開明書店、一九三二年）

には〈読《遊仙窟》〉という文章が収められている。執筆日附は記していない。内容は、一九二七年に出た陳氏慎初堂校印本《古佚小説叢刊・遊仙窟》と章廷謙の北新書局本とを比較して北新書局本の方が良いことを言い、また、当書の性格について自説を述べる。〈夜読抄〉とは全く異なる文である。

材料が少なく推論するのは多少危険ではあるが、〈読《遊仙窟》〉は用意した序文をのちに書き改めたもので、周啓明の手紙三枚がその元の序文であり、章廷謙は二つの序文を並べることに魯迅が怒るのではないかと恐れて魯迅の意向を伺い、あるいは作人の序文をはずすかわりに訳文を巻末に附すのではどうかと伺いをたて、魯迅の拒絶にあったが、結局はやはり収めることにした、と推論すれば、前に並べた魯迅の言葉の説明がつくように思われる。

またこの間に、魯迅が朝鮮方面から別の和刻本を手に入れ、自ら筆写して校訂のために送ってくれた、と章廷謙は書いている。⁽¹⁷⁾ 書簡や日記の中にそのことに触れた記述は明瞭にはない。三月六日の手紙に「代りに校訂してあげよう」とあるのがそれに関連するのだろうか。

原稿は一九二八年八月に印刷にまわし、九月十月と魯迅が替りに校正し、翌年二月に出版された。

いきさつを振り返れば、魯迅が自ら良いと思う方向に、例えば北京大学蔵本と校合せずとも早く出した方がよいなど、章廷謙を引っぱり、章は必ずしもそれに従わず、周作人との関係を持ち込み、最終的にはそれを押し通したことになる。

とはいえ、魯迅の章廷謙宛書簡の文面は、必ずしもそれによって冷えてはいない。

章に男児が生まれたと聞いて喜びを述べ、避妊の方法を問われては丁寧⁽¹⁸⁾に答えているし（一九二八年三月三十一日）、人にはあまり言わないだろう、自分の肺病が悪化したことを伝えてもいる（五月三十日、六月六日）。

同時期の、章廷謙の周作人宛書簡が一通残っている（四月二十八日⁽¹⁸⁾）。冒頭で、三月三十日、四月一日、五日の手紙を前にもらいながら中々返事が書けなかったと述べており、周作人との手紙のやりとりも魯迅とのに劣らず頻繁であったことが

わかる。

また偽魯迅（かつ偽周作人）が出現したことなどの、様々な主として人間関係の情報を伝えており、末尾には変らず二奥様三奥様によるしくと述べ、さらに「秋には北京に帰ることができるかもしれない」と書いている。章は国民党軍が北京の張作霖軍を駆逐せんとしているのを見て、北京へ帰りたいという気持が大きくなってきたのであろう。

六

一九二八年、学校が夏休みに入って、七月六日、章廷謙は李小峯に案内され、初めて上海の魯迅を訪ねた。魯迅が上海に来てからすでに九ヶ月経っている。《遊仙窟》出版のことで話があったらしいが、かねて誘っていた杭州小旅行の承諾を得た。ちようど、やはり杭州から上海に出てきていた許欽文にお供をたのみ、章は二日前に杭州へ帰って旅館の予約など準備をととのえた。

この七月十二日からの約一週間の小旅行は魯迅の後半生の中でも珍しい遊興であり、子供に返ったようにはしゃぐ魯迅の姿が、同伴した章廷謙と許欽文の回想記に書きとめられている。⁽¹⁹⁾食事のせいで体調をくずし、また暑くて閉口したこともあって、予定を早目に切りあげて上海へ帰った。ただ、この決定は突然のことであつたらしく、翌一八日に章廷謙にあてた書簡から、章がこの日もお供するために来ることになつていたのですつぽかして帰ったことが判る。章の回想記ではそこをとりつくりつて、予定通り帰ったように書いてある。

許欽文は魯迅が評価していた若手の作家で、章廷謙よりは数歳年上ながらまだ独身で、この頃やはり杭州で教壇に立っていた。《魯迅日記》によれば、魯迅が上海に到着した翌日、さっそく駆けつけて会っているし、その後も月に一度は上海の魯迅を訪ねてお茶などを届けている。この点で、九ヶ月経つてやっと訪れ、そののちもほとんど訪問していない章廷謙と対

照的だが、それは許欽文の独身の身軽さだけに由来するのだろうか。

この年後半は、魯迅と章廷謙間の手紙のやりとりは再び活発となっている。書かれているテーマは、一つは北新書局の運営をめぐる魯迅と李小峰間の軋轢、一つは章廷謙の北京行き希望とそれを止めさせようとする魯迅の説得である。

北新書局は《語絲》の編集刊行実務をしていた李小峰が設立した出版社で、《語絲》および「語絲派」作家の作品を刊行して歓迎され、急速に大きくなった。後発組出版社の中で最大となり、魯迅は上海の出版社の中で未だ商業主義に毒され切っていない点を評価して、彼の作品集を数多く出していた。

魯迅の書簡で北新書店をたどっていけば、まず、李小峰と孫春台の諍いの発生についての言及から始まっている。諍いはいもかしら「現代評論派」の侵透のせいかもしれないと述べ、内情がわからぬ、孫伏園と北新書局の関係もわからないと書き、春台が「現代評論派」の新月書店と関係をもったことについて不快の意を述べながらも敢えて責めようとまではしていない。⁽²¹⁾

この孫春台は孫伏園の弟で、北新書局の編集者であった。同年十月三日に魯迅が上海に到着したとき、その夜、北新書局の小売店にゆき、林語堂・孫伏園・孫春台と会い、翌日、またこの三人と会合し、記念写真を撮っている。また《朝花夕拾》と訳書《小さなヨハネス》の表紙絵の製作を春台に依頼している。⁽²²⁾つまり別に関係は悪くなっていない。まもなく孫伏園は春台とともに上海で嚶嚶書屋を設立、十二月には国民党改組派（反蔣介石派）の雑誌《貢獻》を伏園編集長で出し始める。この頃には魯迅は彼らとあまり会わなくなっているらしいが、魯迅の書簡の文面は、彼の仕事を冷ややかに見て評価せず、北新書局の悪口を言っているのを不快がる、といった程度で積極的に罵りはしていない。⁽²³⁾

当時の章廷謙の周作人宛書簡を見ると、春台は杭州に住み、伏園も時々来ているらしいが会っていない、李小峰と喧嘩しない者とはつきあわぬのらしい、彼らは本来新月書店の中心人物だったのだから、新月の主人と喧嘩した我々が……、と書

いており、完全に李小峰の側についている（一九二八年四月二十八日）。《語絲》発刊のとき以来、ずっと仕事を共にしてきた仲であるからなのだろう。魯迅の認識とのズレが始まっている。

魯迅の李小峰あるいは北新書局への不満は、校正および印刷所選ぴのいい加減さ、それによる自分の仕事の負担加重にま
ずあり、また原稿の保存不良や、刊行物の誤配にも向けられ、そのうち、手紙に返事もよこさない、言ったことを守らない
と怒り出している。

魯迅が編集している雑誌《奔流》の原稿料を北新が払わず、著者からの問いあわせに魯迅が困っている体のものもある。

北京の未名社の本の売りあげ代金の支払いも滞り、ついには魯迅の印税も支払われなくなる。魯迅は、そうなった原因を經
営方針の無謀な拡大にあると見ていた。⁽²⁴⁾

業を煮やした魯迅は、弁護士に北新書局との交渉を依頼した。李小峰が驚いて謝りにきても許さず、弁護士立ち合いの下
で会議を開くことになった。小峰は調停のため杭州から郁達夫を呼び出し、さらに魯迅と郁達夫は章廷謙を八月二十五日の
会議に呼び出した。そこで協議が成立し、魯迅と北新書局の間は一応落ち着いた。⁽²⁵⁾

この会議に出た章廷謙は周作人宛書簡の中で次のように述べている。

北新と魯迅の事は終わりました。北新未払いの魯迅の印税は、売れた分とまだ売れていない分を合計しますと、計二万未
払いです。十一月に分割して支払うよう、契約を交わし、弁護士がサインしました——この弁護士は二千余元のお金
を儲けたことになりました（初めは四千元を要求したようですが）。私と達夫は、紙型回収の帳簿にそれぞれサインした
だけで、お金は入りません。なのに、この往復で、故なく謂れなく三百元使ってしまった。全くいいとばかりで
した。……

上海で、小峰が我々を招待してくれた宴席で、語堂と魯迅が大喧嘩しました。危うく殴り合いになりそうで、互に「畜生」と罵るのです。私と達夫とでああだこうだと苦労して、やっと引き離すことができました。仲間うちで、いつもこんな風に喧嘩するとは、真に困ったものです。

今回、杭州で私が聞いた北新についての話、紡績工場を作るとか……、をみな小峰に聞いてみました。小峰が言うには、「悪い奴のデマだ。今度の魯迅と北新の紛争だって張友松（悪い奴？）が間で仲違いさせたのだ」と。語堂が漢口でぼろもうけしたなどと張友松がデマをとばしたと、語堂も言っていました。その日、魯迅と語堂が罵りあったのも、これで起こったのです。彼らの中で一体何があったのか、事情に暗い人間にはどうもよく解かりませんが、張友松は春潮書店を開いたのではなかったでしょうか。

（一九二九年九月四日）⁽²⁶⁾

魯迅が張友松のデマを盲信して、北新書局や語堂と無意味な諍いを始めた、とでも言いそうな口ぶりで、「とばっちり」に大いに不満のようである。明らかに、魯迅の方にはなく、李小峰の方に肩入れしている。同席した郁達夫も、この宴席上の諍いは魯迅の誤解に出るものであると、周作人に手紙で書き送っている。⁽²⁷⁾

七

前に見たように、章廷謙はすでに一九二八年四月二十八日の周作人宛書簡の中で、北京へ戻る希望を表明している。国民党軍の北上により張作霖軍の北京撤退がほぼ確実となり、北京の教育界も平穩をとり戻すであろうと、またこの学制の改革の際にポストが廻ってくるかもしれないと希望したのであろう。

魯迅に向っては、いつその意志を伝えたのかは定かでない。魯迅の章廷謙宛書簡から見るところ、最初の反応は、杭州旅

行のあとの同年八月二日の書簡にある、「〔夫人の仕事が〕西湖のほとりでどうにか見つかるなら、別にはるか北平〔北京〕まで行くことはないと思います」。つづいて九月一九日の書簡でもくりかえす、「杭州で、とりあえずは収入源があるのだから、北平に行くことは全然ないと私は考えます。学校要職者は昨日新聞で見ました。百年が文学院の長、半農が子科の長、傅斯年と白眉初が師範の長、我々の目からすれば、彼らは皆いわゆるどうでもいいといった連中です」。前より否定が強くなっている。

この中で罵られているうち、劉半農はかつての《新青年》誌以来の友人だったはずである。それがどうしてこう罵るようになっていたのか。

半農についておそらく最初に不満の意を表しているのは、一九二七年七月十七日の章廷謙宛書簡で、「半農が《語絲》の発行を許さないという、なんと恐るべし。どこからそんな権力を手に入れたというのでしょうか。数日前、彼がユゴーの文章を切り刻んでつけた説明（《奔原》十一期所載）を読んで、その『デイクテイター』ぶりに驚いたものですが、そんなにひどいとは」と述べている所だろう。そして、「《語絲》が停刊するとなれば惜しいと言ひ、八月一七日の書簡でもそう繰りかえしている。どういう事情か全く判らない。創刊して三年近くになり、同人のかなりが北京を去った後の《語絲》は、張作霖軍による発禁にあう前に、すでに疲れを相当見せていたようである。

《語絲》が北京で発禁にあい、上海で魯迅が編集を引継いでまもなく、魯迅は半農と衝突してしまふ。半農が《語絲》に発表（一九二八年二月十七日、魯迅は発表前に見ていない）した文章の誤りにつき、訂正した投書を掲載すると、それ以来半農は《語絲》に文章を寄せなくなった。また、それまで比較的関係のよかった江紹原とも衝突する。彼が紹介してきた文章を掲載しなかつたら、それ以来寄稿してくれなくなったという（魯迅〈我和《語絲》的始終〉）。

しかし問題はそれだけでなく、魯迅の《語絲》編集方針に北京の方では不満だったようである。

例えば掲載作品のことで、三月には国民党側からの警告をうけ、八月には浙江省での発禁処分にあつている。このような傾向を念頭に置いてのことだろう、北京の若い友人がやっていた雑誌《未名》を上海で引継いで編集したらどうかという話を断つたとき、「もし私が上海で編集し発行し、攻撃的態度（文学界に対して）に転ずるとしたら、北京の諸友は首肯されるでしょうか。文壇は大掃除が必要ですが、ただし、いきおいどうしても敵を数多く造ることになります」と書いている。⁽²⁸⁾

このような「攻撃的態度」、さらに、上海で編集するから《語絲》誌上に自然と増えてくる在上海人の文章、そしてその傾向性、これらのものに在北京の錢玄同らが不満を言っていると章廷謙に伝わってきたのであろう。この年の末（十二月二十七日）の章廷謙宛書簡に「玄同の話は真に受けることはない。鳳拳や玄同が同意するか否かなど、これも気にすることはない。近頃、私は顧慮遠慮なしになってきて、《語絲》が浙江で発禁になっても少しも腹が立たぬし、よつてたかつて攻撃されても腹が立たない。遠慮なしというのは、おそらく道に近いのでしょう」とある。半年後には「玄同のような奴の批判は一顧だに値しない。自分は何もせずについて、人に難癖をつけているだけの人ですから」（一九二九年六月二五日）とも言っている。

ほぼ同時期には、また、「青島大学は開きました。文科主任は楊振声。このお人は近頃周啓明の類と繋りをつけたようです。今後は、各派離合して相当様変わりするでしょう。語絲派も消滅です」（七月二十一日）と述べ、かつての親友たちに対する態度と認識を示し、関係回復の希望をもう持つていないことを表明している。

この認識が明瞭になるについては、同年五月から六月にかけて二十日間北京に滞在したときの見聞が大きく係っている。およそ三年ぶりの北京だったが、あまり居心地がよくなかったらしい。予定を二週間余繰りあげて上海に帰っている。この北京滞在中の様子を、許広平に書き送った書簡から窺うと、⁽²⁹⁾学生から歓迎をうけ、北京大学と燕京大学から招聘されたが断る、一方、魯迅にポストを奪われるのではないかと疑心かられる者があり、彼らに悔蔑の念を抱いた、「現代評論派」の

「正人君子」が空けていったポストをかつての批判派が埋めて、自分が「正人君子」に変わってしまった。《中国小説史略》や石刻拓本の収集などの学問的仕事に自信を持った、許広平との同居で批難攻撃にあうかと身構えていたが、多少好奇の目で見られる程度で、比較的楽だった、ということらしい。もちろん魯迅側からだけの観察である。

上海に帰って、章廷謙に北京の教育界の様子を「以前私が北京を出たときよりもバラバラで、つまらぬことで争っている」と伝え、燕京大学にいた沈士遠がこちら（浙江）に来るぐらいだから、杭州があたりよりひどいとは限るまいと、彼の北上の気持ちを抑えようとしている（六月二五日）。さらに八月十七日には北京大学の紛糾に触れ、北京の諸公（周作人を始めとする「語絲派」在北京人士）が「現代評論派」と結託をしたとの観測を述べている。章廷謙を、自分と同じく「現代評論派」には絶対近づかない人間だと見ての説得である。

しかし、章廷謙にとつて言えば、周作人と「現代評論派」が結託した、として、さらに「現代評論派」には近づくな、となれば、周作人との関係を切れと言われたに等しい。前に見たように、この時期の彼は、周作人に親近感を示し、魯迅に不快の念を持ちはじめていたのだから（九月四日書簡）、二人の感情は離れてゆく。それに章廷謙は杭州が嫌い、北京に仕事欲しかったのだ。

秋にはまた北上のことを魯迅に相談したらしい。十月二六日および十一月八日の書簡で魯迅はくりかえし北上をやめるよう書いている。北京の教育界はまだ落ちついていないから、様子を見てからの方が良く、また、四五年後には北京は人の住めない荒涼とした所になりかねない、杭州での好条件を確保した方が良く、と。

一方北京では、八月の魯迅と北新書局の紛糾、および宴席上での林語堂との罵りあいが伝えられ、五月の魯迅北上のとき魯迅からそっけなく扱われた錢玄同らが、魯迅は気が狂ったと言っていたらしい。

疑古（「錢玄同」）と半農は、人に会うごとに、私が上海で気が狂ったと言いつらしています。これは恐らく林玉堂（「語堂」）と関係あります。……

語絲派の者はかつては確かに暗黒と闘いました。しかし、地位を手に入れるや、自分自信が暗黒に変じてしまい、一声もあげず、小細工ばかりを用いて、それでおどしながら飯のタネを守っているのです。先月、紹原から《大公報》副刊を二枚送ってきましたが、その中に《^{アメリカ}美国評論家薛爾曼評伝》があつて、彼は後に思想が変り、友を敵となし、終には海に落ちて溺死したというのです。これも現今の北平式の小細工です……

下司な奴には必ず下司な根性があつて、叩いてやらないことには収まらないのです。今年、《萌芽》誌に《我和^と語絲》^の的始終》を発表しましたが、これが彼らにお見舞したまだ手加減をした一発です。この雑誌は杭州では買えないでしょうから、切りとって同封します。このほか何人かには特別に何発か叩いてやらないといけない。……

一九三〇年二月二十二日致章廷謙書信

従つて、前年年末に書かれ、この年二月一日に発表された《我和語絲》的始終》は単なる回顧的な文章ではなく、いわゆる「語絲派」の崩壊を宣言し、それとの関係を清算する一文だったのである。

その後、章廷謙宛書簡に、三たび章の北上の件が出てくる。杭州で埋もれてしまうと言うが平穩に生活できれば上々ではないか（三月二十一日）、蔡元培が引いてくれて同行するのならそれもかまわないが、蔡元培自身がはっきりしないし、北京の文化界は泥の穴だし、刺激が多いともいえないし（三月二十七日）、氣候人情は杭州より北京の方がよいが、学界はそれでもあるまい、杭州の方が収入が多いなら移るまでもないではないか（五月二十四日）と。

前二度のときより、引き留めようとする説得の口調がかなり弱くなつてきている。依然として味方に対する口調ではあり

ながら、例えば一年半まではあけすけに誘っていた蔡元培を、この時は「確かに旧知の者を大変気にかけてくれる人だから」と、やや他人行儀に書くなど、多少の筆調の変化が見られる。収入の金額の比較ができるからには具体的なポストの話も出ているのだろうし、魯迅の北京教育界への強い反感を知ったうえで、なおも行こうというのだから、すでに説得できそうもないと思いついてるのだろうか。

ただ文面は未だ好意的である。この段階になっても、自分に包み隠しせず相談をしてくる彼の人の純朴さに感じてのとどろうか。

そして、魯迅の章廷謙宛書簡は、実質的にはこれで終了する。章廷謙に対しての類なく打ち解けた態度もこれで終了する。彼は北京の諸公を選んだのだ。

この年の十一月、章廷謙は浙江大学農学院教授の職を去り、南京国民政府教育部に勤め、たちまち十二月には自ら退職して再び杭州で教職につき、この月正式に北京大学校長となった蔣夢麟に招かれて、翌三一年七月北平に行き、北京大学校長室秘書兼任講師のもとに職に戻った。⁽³¹⁾

この北上の途上だろう、七月六日、章廷謙夫妻は李小峰夫妻とともに上海の魯迅宅を訪れている。前年の十一月に章廷謙はやはり李小峰とともに訪れているが、魯迅が不在だったので会えていないから、実質的には上海での三度目の訪問ということになる。

その翌年の三二年の十一月、母親の病氣見舞のために魯迅は再び北京に行き、二週間滞在するが、このとき彼と許広平の間で交わした手紙から見ると、章夫妻に対し、悪感情を抱いていないらしい。北京を去る前の晩には、紹興から帰ったばかりの章廷謙が小宴を設けて接待し、翌日の離京時には駅まで見送りに行っている。⁽³²⁾

その後の《魯迅日記》の記述によれば、翌三三年に章廷謙が上海の魯迅宅を訪れており、また前後計三度魯迅から本の贈

呈を受け、一度手紙を出している。魯迅が返事したとの記載はない。

解放後に章廷謙が書いたものでは、一九三六年五月まで本の贈呈を続けて受けているから、自分に対する魯迅の信頼は變つていないのだと主張しているが、普通の知人の扱い程度になっていることは明白である。

八

魯迅の溢れるような情と好意を浴びた章廷謙は、最後には魯迅に従う道をとらなかつたが、この魯迅の章廷謙に対する態度の中に、そう仕向けた要素もないではなかつた。

前述の中に出てきた例でいえば、まず、洪の彼を強く説得して、自分が不愉快で今にも去らんとしている厦門大学へ呼びよせ、章は結局後悔することになった。彼が厦門大学から追いたてを食うと、魯迅は広州の中山大学へ呼びよせようとした。無論、生活を心配する好意からである。同時期、若い頃からの親友許寿裳を、やはり多少強引に呼びよせている。許寿裳は着任後ほどなく「清党」クーデターにぶつかり、魯迅に倣つて辞表を出すと、すぐ受理され、再び仕事を求めて浙江へ去らねばならなかつた。³⁴⁾

江紹原が中山大学から引続いて招聘され赴任を迷っているとき、魯迅は自分は広州から脱出せんとしていながら、江紹原には赴くよう何度も勧めている。³⁵⁾ 江紹原は結局行かず、杭州で教職を勤めたあと北京大学講師に転じた。

多少似た例を他にも挙げれば、《語絲》が発禁処分をうけ、周作人らが一時身を隠したとき、南に来た方が安全なのにと言ったことがあり、また、これは思いつきの軽い提案だったようだが、北京の未名社が維持困難だと聞いた魯迅は、上海移転あるいは北京上海の二ヶ所での出版などを提案している。³⁶⁾

当然にも親切心好意からなのだが、自分が事情を了解している所へ、つまりは自分の近くへ人を呼びよせたがるくらいが

ある。これを断つても別にそれを根に持つことはない、純心な好意だとしても。

人は、自分の受けきれぬ情を注ぎかけられて、結果としてその人と同じ感情を持つことを強制され、身に余る好意を受けて、自分の行動の選択に枠がはめられたように感ずれば、相手を重たく、時には逃げたく思わないだろうか。章廷謙の場合がそうであつたように筆者は想像する。

他方、魯迅の、時として無防備な、純心な好意は、人がそれに乘つてきた場合、彼に債務を負わせることになる。もし相手が要求を自ら手控える遠慮深い人でなかつたならば、魯迅はいきおい犠牲を強いられ苦痛の声をあげることにもなつた。例を挙げれば、厦門から広州そして上海と魯迅についてまわつた廖立峨。

また、自分の好む者が身近にいることを求め、身近に付き従つてくる者がかわいがる心情、それは人間だれしものことだが、魯迅の場合それが相当強いようで、人を得ないと、人を見る眼を疑われかねぬことになる。例えば、北京でかわいがつた高长虹、一九二九年北京行のとき馬幼漁に仕事を世話してもらつた韓待桁、そして、北新書局との紛糾のおそらく本当の一因であつた張友松。魯迅は利用され、ときには逆に咬みつかれる。

この魯迅の無心の好意は、〈聰明人和傻子和奴才〉(《野草》所収)の「傻子(愚か者)」の親切心にどこか似ている。と言つてももちろん、魯迅の言う通りに動かなかつた者がすべて「聰明人」や「奴才」であつたはずはない。魯迅の方にも、つきあいきれない所があつたと見るべきなのであろう。

魯迅の「彷徨」の時期を、《呐喊》自序》を書いた一九二二年末から《我和《語絲》的始終》を書いた一九二九年末までと仮に設定するならば、それは、《語絲》の時期に、章廷謙との密接なつきあいの時期に、そして、「五四新文化」の啓蒙者

から左翼文学の指導者へと姿を変えた時期にあたる。

一九三〇年早々、魯迅は中国自由運動大同盟の發起人として大々的に報道され、すぐつづいて、中国左翼作家連盟の常務委員に選ばれ、以後、左翼文学の代表的作家としての役割を果たした。

他方北京では、やっと平穩をとり戻した一九三〇年、周作人を中心とする雑誌《駱駝草》が刊行された（五月から十一月まで）。執筆メンバーは北京在任の旧「語絲派」の面々である。旧「語絲派」から魯迅と章廷謙らが抜けただけと言ってすらいよい。このメンバーから言っても、文体から言っても、《語絲》を受けついでいることは明らかだが、魯迅の言うように、社会批評は多くなく、また激しくない。全体に温和な文芸に傾いている。もともと直接には、《語絲》とは別にすでに一九二六年に出された文芸誌《駱駝》を受けついでいるのだから当然と言えば当然である。とはいえ、のちに「語絲派」と言えば、むしろ、この《駱駝草》に引きつがれたイメージで受けとられるのが一般であった。《駱駝草》停刊後のこの執筆メンバーは、林語堂の主宰する雑誌《論語》（一九三二年九月）に流れ、ここに魯迅の言った、北京の諸公と「現代評論派」との合流が明瞭となった。

章廷謙川島の名はこれらの雑誌に登場しない。《著作簡表》の記すところ、次に文章を書くのは、一九四八年十月、朱自清の死を掉んだ文章《不应当死的又死了一个——掉佩弦》である。

注

(1) 章廷謙《和魯迅相处的日子》（四川人民出版社、一九七九年）所収の《憶魯迅先生和《語絲》、《弟与兄》ほか。《憶……》の方は他の人民文学出版社版にも収める。

(2) 孫玉石《懷念川島先生》、陳漱渝《憶川島先生》（ともに《魯迅学刊》一九八一年第二期所収）、袁良駿《川島先生生平著作簡表》《川島選集》所収、人民文学出版社、一九八四年）、同《魯迅和川島》《魯迅研究》一九八三年第四期）ほか。なお、陳漱渝の文は、筆名川島が日本の小説『不如帰』の主人公の姓に由来することを伝えている。

- (3) 孫妻君〈川島選集・後記〉、前掲書所収。
- (4) 章廷謙〈和魯迅在厦門相处的日子裏〉（前掲書各版所収）、また、魯迅（一九二六年十月十日、二十三日、十一月二十一日致章廷謙書信）および〈十一月二十一日書信〉に附された人民文学出版社十六卷本（一九八一年）の注釈ほか。
- (5) 章廷謙〈和魯迅在厦門相处的日子裏〉。
- (6) 《魯迅研究資料》第十二輯（一九八三年五月）、第十四集（一九八四年十一月）所載。
- (7) 魯迅（一九二七年四月二十日致李齊野書信）、（四月二十六日致孫伏園書信）、（五月十五日、五月三十日致章廷謙書信）ほか。
- (8) 例えば、魯迅〈怎麼寫〉（一九二七年十月十日發表、《三閑集》所収）に紹介する《越縵堂日記》。また、後のことになるが、章廷謙に送った雑誌が郵便局で没収となったとき、魯迅は「これからはもう送らない」と手紙に書いて出し、一方名前を変えて雑誌を送りつけたという例もある（一九三〇年五月二十四日致章廷謙書信）および章廷謙〈魯迅先生所送給我的書〉前掲書所収。
- (9) 前掲《魯迅研究資料》第十二集、第十四集所載。
- (10) 同前。
- (11) 日付のうち「四月」は《魯迅研究資料》編集者による校定補記であるが、文中にすでに「清覚」の記載があり、「四月」は誤りの可能性がある。
- (12) 章廷謙〈弟与兄〉、〈魯迅先生和雜文〉、〈説許広平的《魯迅回憶録》〉、〈説《魯迅日記》雜記〉（前掲四川人民出版社版所収、人民文学出版社新版には〈弟与兄〉と〈説許広平……〉を収めない）では、魯迅や許広平の評言を多く引用し、それに乘った形での謗りを書いているし、インタビューに答えた談話（一九七五年）では羽太信子を大いに罵っている（陳漱渝前掲文）。ただ、最後に発表した文章〈永恒的激励〉（一九八一年、川島選集所収）では、暗に周作人を指して「彼らが幼年からすでにいかに同じでなかったかと、このように推論するとすれば、それは恐らく事実在即しているとは言えないだろう」と書き、虚偽に反対するのが魯迅の精神なのだから魯迅研究でもそうあるべきだと述べている。以前に書いた文章の「偏り」についての反省があるのだろうか。
- (13) 魯迅（一九二七年十一月七日致章廷謙書信）、〈同日致江紹原書信〉、周作人《知堂回想録》（香港聽濤出版社、一九七〇年）所収（二二五 三沈二馬（下）、一六二 北大感旧録（八））ほか。避難した先は、菜廠胡同の日本武人の家というから、坂西利八郎宅と思われる。
- (14) 章廷謙〈記重印《遊仙窟》〉、〈憶魯迅先生一九二八年杭州之遊〉、前掲書所収。また魯迅（一九二八年三月三十一日致章廷謙書信）ほか。
- (15) 章廷謙〈記重印《遊仙窟》〉。

- (16) 人民文学出版社十六卷本《魯迅全集》(一九八一年)第十一卷(一九二八年三月一四日、十一月七日致章廷謙書信)注釈〔1〕。
- (17) 章廷謙〈記重印《遊仙窟》〉。この文の記載には、細かな所で書簡から判明する事実とのくいちがいがある。
- (18) 前掲《魯迅研究資料》第十四集所載。
- (19) 章廷謙〈憶魯迅先生一九二八年杭州之遊〉。許欽文〈伴遊杭州〉(《魯迅日記》中的我)所収、浙江人民出版社、一九七九年)。章の文の末尾に「魯迅先生と景宋〔許広平〕夫人の今度の来杭はハネムーンに来たみたいなのだと、許欽文が戯れに言ったことがあるが……。」と書いているが(一九五六年)、欽文の回想記ではこれを受けて、「魯迅先生の一九二八年来杭はハネムーンを過ぎたためであったと、或る者が言っているが、ハネムーンで他人をすつと側に連れておくなど誰がするだろうか。旅館での五泊はずつと私が〔同じ部屋で〕つきそっていたのである」と書き、不満の意を表明している。
- (20) 魯迅〈一九二七年十二月二十六日、二八年三月十五日致章廷謙書信〉。
- (21) 魯迅〈一九二七年七月七日、七月十七日、七月二十八日致章廷謙書信〉。
- (22) 魯迅〈一九二七年十月四日、十月十四日致台静農・李霽野書信〉および《魯迅日記》(同年十月)。ただ《朝花夕拾》の表紙はのちに改めて陶元慶に製作を依頼した。
- (23) 魯迅〈一九二七年十二月九日、十二月二十六日、一九二八年五月四日、一九二九年一月六日致章廷謙書信〉およびその十六卷本注釈。
- (24) 魯迅〈一九二九年一月六日致章廷謙書信〉、〈三月二十二日致李霽野書信〉、〈六月二十五日致章廷謙、白莽書信〉、〈七月二十一日致章廷謙書信〉、〈八月七日致章蕪蕪書信〉。
- (25) 魯迅〈一九二九年八月十七日、八月二十四日致章廷謙書信〉、〈十月十六日致章蕪蕪書信〉、《魯迅日記》(同年八月)、またそれぞれの十六卷本注釈。
- (26) 前掲《魯迅研究資料》第十二輯所載。
- (27) 郁達夫〈一九二九年九月十九日致周作人書信〉、《魯迅研究資料》第七輯(一九八〇年十二月)所載。
- (28) 魯迅〈一九二九年七月八日致李霽野書信〉。
- (29) 魯迅《兩地書》(第三集)。および、その材料となった原書簡、《魯迅景宋通信集——『兩地書』の原信》(湖南人民出版社、一九八四年)所収。
- (30) 魯迅〈一九二七年六月十二日、一九二八年九月十九日致章廷謙書信〉ほか。
- (31) 前掲《川島先生生平著簡表》。

- (32) 魯迅へ一九三二年十一月十六日致許広平書信、《魯迅日記》〈同年十一月二十七日、二十八日〉。
- (33) 章廷謙へ魯迅先生所送給我的書。《魯迅日記》一九三六年五月八日の項には「吳朗西持白紙縑面本《死魂靈百図》五十本来、即陸統分贈諸相識者」とあり、この「相識者」に章廷謙が含まれているのだろう。
- (34) 魯迅へ一九二七年一月二十九日、一月三十一日致許壽裳書信、へ六月十二日致章廷謙書信、ほか。また許壽裳へ広州同住、《亡友魯迅印象記》（人民文学出版社、一九七七年新版）所収。
- (35) 魯迅へ一九二七年八月二日致江紹原書信、またへ同年七月十七日、二十八日致章廷謙書信、ほか。
- (36) 魯迅へ一九二七年十一月七日致章廷謙書信、へ一九二九年六月二十四日、七月九日、七月三十一日致李霽野書信。
- (37) 《駱駝草》については、代田智明「解題——《駱駝草》をめぐって」を参照。影印本《駱駝草》（アジア出版、一九八二年）所収。